

カタツムリの挑戦

園長 児嶋 草次郎

梅雨に入ったある日の早朝

アスファルトの道を散歩していると小さなカタツムリが道を横断しようとしていた

石垣のある方からアジサイの咲いている垣根に向かって

いくらなんでも5mの道をお前が横切るのは無理だ

人の靴か自動車のタイヤに踏みつぶされてしまうぞ

私は豆つぶほどのそのカタツムリをアジサイの根元に投げ入れた

その時小さな声がした

人間だって6万年前アフリカから小舟で大海にこぎ出したではないか

砂漠に向かって歩き始めたではないか

次の朝もカタツムリ達は挑戦していた

今回は、ある後援会員の方との会話を掲載します。

A氏 やあ久しぶりです。「友愛通信」5月号の「なぜ後援会が必要なのか」、は、私たち「石井十次の会」に入会している者にとって大事な内容だと思って、しっかり読みましたよ。

私 ありがとうございます。今私たち社会的養護の世界も、制度的にも社会の状況的にも転機を迎えており、流されないように立ち止まって、後援会の皆様と情報を共有しておきたいと考えました。

A氏 4月号の「養護施設から世界が見える」もおもしろかったけど、特にコロナ後、時計の振り子が反対に向かって振れ始めているようにも感じる。それまで、アメリカ一強の世界になって、アメリカの価値観でグローバリゼーションがどんどん進んでいたのに、ロシアのウクライナ侵略を機に、世界各地で反動が始まっている気がする。アメリカ自身もそうだ。

私 そういう地球規模のうごめきと、私たちの住む小さな社会的養護の世界とがつながっている、最近そう感じているのです。特にフランス人エマニュエル・ドット氏がロシア・ウクライナ戦争は、家族的価値観の戦いでもあると言っているのを読んで、見えて来たような気がします。自由・民主主義の裏にある個人主義・核家族的価値観対父系制的な伝統的家族主義的でしょうか。アメリカ民主主義は個人主義・人権主義を外国の家族の中にまで押しつけて来た。

A氏 あなたが言いたいのは、そのアメリカの価値観によって、社会的養護の世界まで改革しようとしているとー。

私 そうです。日本の大家族的養育文化まで、個人主義・人権主義で変えようとしているように感じるのです。それが世界の潮流である、世界標準であるという大義名分の名のもとにです。

A氏 なるほど。ところで、今日は「友愛通信」4月号・5月号を読んで、あなたに質問したいことがあって電話してみました。一つは、あの「新しい社会的養育ビジョン」が出されて以降、現実

に現場においてどのような変化が起きて来ているのかい。「大学等の進学率が58%です」などと書いてあり、けっこうなことだと私は感じたのだけど。何が問題なのだろう。

私 あ改革は、はっきり言って、里親委託率を世界標準化するための改革です。それを実現するために「家庭優先の原則」を児童福祉法の中に入れました。言ってみればあたり前のことです。この言葉が大義名分となり、行政はなかなか子供を施設に入れなくなりつつあります。また、施設で生活している子供も、できるだけ早く家庭復帰させようとするようになりました。「家庭優先の原則」からすれば、施設に5年10年といふことは悪なのです。施設に長期間いることは、パーマネンシー保障（永続的な支援）ができないと決めつけているのです。その点、里親だったらできるとしています。アメリカの里親制度は崩壊していると聞いたことがあります、日本の偉い人たちは、里親委託率75%という数字しか見えてません。委託率と進学率との間には何の関係もありません。

A氏 「なかなか子供を施設に入れない」、「家庭復帰を早くする」ということが子供たちにとってどのような問題を生じせしめるのだろうか。

私 虐待とかネグレクト（育児放棄）とかの理由で入所するケースが70%を越えるような状況になって来ています。また子供自身も発達障がいや生活習慣・自律力の未熟性等様々な課題を背負って来ているケースが多くなって来ています。

虐待等で人間不信に陥った子供の人格をどう健全に育て直すのか。また、性やゲームに流されてしまった子供にどう自律力をつけていくか。さらに、オオカミ少年の話じゃないですけど、小学下級生レベルの生活習慣しか身につけてない中学生に、どう再養成して自立できる力を身につけさせていくのか。これらの課題をどう解決していくかが、子供にとって一番重要な問題なのです。

偉い人たちは、子供と言えば乳幼児しか頭に思い浮かばないのでしょう。家庭（的）環境の中に放り込めば、この問題は自然にクリアされるとイメージしているのです。そういう課題を背負う子供たちが地域の中に取り残されるという問題を生じさせていく恐れがあるのです。

A氏 こども家庭庁ができて、子どもまん中云々とか言って、その施設の充実・強化に努めているように一般の人には見えるけど。

私 私たちは末端の現場にいて危機感を感じています。数日前、ある町の要保護児童対策地域協議会という会議が行われ、その代表者会議に出席しました。この会議は児童福祉法にも位置づけられ各市町村が設置しなければならないことになっており、要保護児童等の保護・支援を図るための協議を行う場です。町では不登校児のための教室を作り、またそういう子供たちのための居場所を作り、至れり尽くせりの支援を行っていますが、私は次のように発言しました。

「不登校になった子供の、また養育能力の低い家庭の子供の、抜け出す力、這い上がる力をどう養っていくのか、これからは地域の中で考えていかねばならない。」

施設では、昔から集団の力動を活用した指導が行われて来ました。グループワークとして方法論としても位置づけられ、不登校で入所した子供は次の日から一日も休まず登校したものです。

「みんなで渡れば恐くない」の心理をうまく活用したものです。

ところが、今は個人主義の時代。集団養育の悪い面ばかりが強調され、個別指導の中でなんとか改善しようとしします。施設対抗の野球やバレーボールの試合も、今ではなかなかできなくなって来ています。

そいう子供たちを施設に入れないということは、地域の中で何とかしなければならないとい

うことです。生まれた時の子供は天子ですが、育ちの中で様々な負の荷物を背負わされたとするならば、その荷物を振り払い自己実現できるように導くためには、本人も指導者も、修業と言ってもよいくらいの鍛錬を必要とするのです。我々の先人たちはそれを実践して来たのだし、そういう文化は児童養護施設だけではなく、学生寮や運動部の合宿所などにも生き残っていると思います。

A氏 今、学校の先生たちの部活動負担を減らすために、部活動指導を地域にまる投げしようとする動きも出て来ているようだけど、地域に受け皿がそんなにあるとは思えない。

私 施設が地域の中に出ていかねばならない時代に入ってきているということなのでしょう。どう連携を取っていったらよいのか。例えば学童保育のようなやり方で、家庭に課題がある場合は、夕食・入浴まで提供して、その家庭まで送り届けている例もあります。家族も含めて支援するのです。

A氏 地域も家庭も崩壊しているような社会状況の中で、施設の入所を制限して縮小していくというのは、時代のニーズに逆行しているように感じるね。不登校児や虐待児童が増えているのなら、もっともっと施設を充実させていってもよいと思う。里親推進や家庭優先の原則とは、別次元の問題だね。私には問題をスリ替えているように感じるけど。

私 時計の振り子のお話を最初にされましたけど、私は、このアメリカをマネするやり方はいずれ破綻すると思います。その時、また施設養育は必要ということになるのかもしれない。しかし、それまで、施設が今の流れに耐えられるのかと心配しています。子供を本気で自立へ向けて指導しようとするれば、ものすごいエネルギーを必要とします。人間が相手と信頼関係を構築し、その相手に同一化される存在になろうとするれば、それなりの覚悟でお付き合いをしなければならない。子供だって同じです。心理学的な小手先の手法で接したからと言って、子供の人格はそう変わるものではない。人間対人間の真剣勝負です。我々の先人たちは、それをやって来たのです。それが、日本人の誇るべき精神文化です。

A氏 なるほど、大学等への進学率 58%は、その覚悟を持って働いている職員たちの取り組みの結果だね。次の質問をしたいのだけれど。

私も子育ての経験があるので、子供を一人前の人間として育て上げる苦労はして来たつもりだ。我々一般人の場合には、それぞれの価値観でジタバタしているうちに、気付いたら自立していたという感じなんだけど、あなたたちの場合、石井十次の理念とか日本の子育て文化とか、その背後にある何か理論的根拠はあるのかい。経験的に話すだけでは、一般の人たちに対する説得力としては弱くなってしまう。

私 職員たちにも資料として渡してあるのが、心理学者マズローの欲求五段階説です。実践を積み重ねて来た人間にとっては、分かりやすい理論です。ピラミッドの図を書いて、下の方から生理的欲求、安心・安全の欲求、所属と愛の欲求、自尊心と他者からの承認の欲求、そして自己実現の欲求へと欲求は進化していきます。基盤となる生理的欲求、安心・安全の欲求がある程度満たされないと、上へ進めないという現実もあります。

これは、子供たちを見ていても感じることです。虐待を受けた子供は、安心・安全の欲求、所属と愛の欲求は満たされていませんから、人間に対する信頼も育っていきません。また、年齢相応の生活習慣が身につかないと、周囲から馬鹿にされたりしますので、自尊心も育ちません。思春期に入ってから重要なのは、自尊心と他者からの承認の欲求が充足されるということでしょう。それまでに生活習慣も一応確立しておかねばなりませんし、他者から承認されるためには、自分な

りに自信を持てる世界を築いておかねばならないでしょう。スポーツで自信をつける子供もいますが、友愛園の方法論は、石井十次伝来の労作教育になります。人間が人間としての生命力に目覚めるためには、自然と触れ合うのが一番良い。みんなと一緒に米を作ったり野菜を作ったりしているうちに、自らの五感の可能性を実感していき、自己肯定感を持つようになります。そして、自信をつけて志を抱くようになるのです。これが自己実現の欲求です。さらに自己超越の欲求も持つようになると言われていますが、世のため人のために役立つ仕事につきたいという欲求です。今春小学校の先生になったS子さんは、ここまで到達したと見ています。

A氏 なるほど。マズローの欲求五段階説は、マネジメントの話で聞いたことがあるな。次に最後の質問だけど「草莽崛起」。我々支援者としては、何を想定していたらよいのだろう。

私 ありがとうございます。今回の米騒動もそうですが、先の読めない社会となって来ています。「社会的養育推進計画」に対しては、私は非常に不安を持っています。それにそって我々も歩んでいかねばならないとは思っていますが、はっきり言って、これから地域の中に支援を必要とする子供たちが次々取り残されていくというのが一番恐れていることです。5年後、一応この計画のゴールということになっていますが、里親さんも施設も崩壊ということにならないようにしていかなければなりません。

20年前、私たちは石井十次の映画を作りました。その資金1億円以上を集めるために、宮崎県内全域に映画作りの賛同人の和・輪・環づくりの活動をし、結果的にできました。

具体的に今後どういう支援行動をお願いするかは、今の段階では考えられませんが、「100匹目のサル」じゃありませんけど、心がつながっていけば奇跡は起こると信じています。動きをしっかり見守っていただきたいと思います。

A氏 分かりました。世界の動きを見ていても、5年後10年後のことは、ほとんど想定できないような社会になって来ています。子供たちの未来が奪われることのないように活動していったほしいし、いざとなったら私たちも活動できるように心の準備は常にして行こうと思います。あなたも体を大事にして、まだまだがんばってください。今回は、長電話に答えていただきありがとうございました。

私 ありがとうございました。カタツムリの歩みのようなものかもしれませんが、もうしばらくは、老骨にムチ打ちながら前進していきます。